

須賀洋一教授・丹治恆次郎教授退職記念号によせて

法学部長 田中通裕

2003年3月末日をもって、私たちが深く敬愛してきた須賀洋一先生および丹治恆次郎先生が、本学を定年でご退職になられました。両先生のご在任中のご活躍と、法学部への多大なご貢献を感謝し、ここに『外国語外国文化研究』のご退職記念号を発刊する運びとなりました。

須賀洋一先生は、1968年に本学法学部に着任されて以来、永年にわたり助教授・教授として、本学の研究・教育に貴重なご貢献をいただきました。教育面では、法学部でのドイツ語、人文演習などのほか、大学院でも言語コミュニケーション文化研究科教授として地域文化特殊講義C（ドイツ）を担当されました。研究面では、ドイツ近代文学における「市民意識」をテーマとする著書のほか、シラー、ヘッベル等に関する多数の論文を執筆されています。学会活動でも、阪神ドイツ文学会幹事として活躍されるとともに、ドイツ語学文学振興会の協議員としてドイツ語の普及に努められました。

研究・教育に厳しい先生ではありますが、人情味あふれるご性格から多くの学生から慕われてきました。教授会での先生はどちらかというと寡黙ではありましたが、その発言には重みがあり、私たちが気付かない視点からするどい指摘をされたり、スジの通らないことは許さないという気迫を感じることも多々ありました。

先生には、ご退職後も非常勤講師として講義を担当していただいています。先日もある会合でお元気な顔を拝見し嬉しく存じました。今後のますますのご健勝とご活躍を願っています。

丹治恆次郎先生は、1968年に本学法学部に着任されて以来、永年にわたり専任講師、助教授、教授として、本学の研究・教育に貴重なご貢献をいただきました。また、1985年から1990年までは、学長補佐として大学行政に携わりご活躍なされました。教育面では、法学部でのフランス語、人文演習などの講義はもとより、大学院でも文学研究科や総合政策研究科における講義、さらには2001年度からは言語コミュニケーション文化研究科教授として講義を担当されました。研究面では、近代フランスの表現理論を対象として研究を進められ、とくポール・ヴァレリーの研究ではわが国の第一人者であります。近時はポール・ゴーガンの表現論的意味および「比較文化論」の研究にも大きな成果を挙げておられます。

一見するところ豪放磊落な印象の反面、きめ細やかな感覚をおもちの先生で、多くの学生から慕われてきました。教授会等で先生のご意見を伺う機会も多くありましたが、古今東西の思想・文化を背景とした教養あふれる先生の発言に圧倒されるばかりでした。

最近体調を崩されていると聞いていますが、一日も早いご回復をお祈り申し上げます。今後のますますのご健勝とご活躍を願っています。